宮城県文化財調査報告書第 39 集

土平遺跡発掘調査概報

昭 和 50 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
東北地方建設局仙台工事事務所

序

柴田町に所在する土平遺跡は，この附近より石器や土器片が出土することで周知されていた遺跡であります。今回，東北地方建設局は柴田町周辺の国道4号線の交通緩和のため柴田バイパスを計画しましたが，法線内にこの遺跡のかかることが判明いたしました。そのため同建設局仙台工事事務所の委託を受けて，記録保存のため発掘調査を実施することになりました。

発掘掘調査は10月中旬より12月末までかかり，気候的にはあまり恵まれない時期でありました。しかし調査の結果は奈良時代から平安時代初頭にかけての約20軒の竪穴住居跡群と1基の掘立柱建物跡を発見し,台地上での住居の占地のあり方，住居の方位と構造等の新知見を得ることができました。

なお，発掘調査にあたりまして御協力，御援助をいただきました柴田町教育委員会をはじめ補助員の学生諸君，東北リコー株式会社ならびに地区民の方々に対し調査概報の上梓にあたって，深く感謝の意を表する次第であります。

おわりにこの調査報告書が学術的にも一般の方々にも広く活用されることを期待するとともに今後とも文化財の保護に一層の御理解と御協力とをお願いいたします。

昭 和 50年 3月

宮城県教育委員会教育長

津 軽 芳 三 郎

例　　言

1. 本書は柴田バイパス工事に伴う土平遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査期間

　　昭和 49 年 10 月 14 日～12 月 26 日

3. 調査主体者

　　宮城県教育委員会

　　東北地方建設局　仙台工事事務所

4. 調査担当者

　　宮城県教育庁文化財保護課

5. 調査参加者

　東北学院大学学生　清水毅　佐藤房枝　田中礼子　伴野幸子　門馬敦子　原志津　我妻智恵子　相沢里枝子

　東北大学学生　　柳瀬和幸

6. 地元協力者

　　永山長志　加藤正　松崎武雄　平間武男　安藤好之　平間房吉　高野敬三郎　畑山三郎　松崎衛　畑山芳美　田丸清二郎　平間徳雄　渡辺善作　平間伝治　平間みつえ　西本文子　大久保ふく　菅原みはる　加茂よね子　稲村ふじの　平間きよ　佐藤柳子　平間伝治

7. 調査協力機関

　　柴田町教育委員会

8. 本遺跡の遺跡記号「DM」である。
9. 本書の執筆，編集は宮城県教育庁文化財保護課調査係が行った。

目　　次

頁

Ⅰ.　調査に至る経過 1
Ⅱ.　位置と環境 2
1. 位置と自然環境 2
2. 周辺の遺跡と歴史的環境 4
Ⅲ.　調査の経過 5
Ⅳ.　調査の成果 8
1. 遺物包含層 9
2. 竪穴住居跡 10
3. 掘立柱建物跡 32
Ⅴ.　まとめと問題点 33

Ⅰ　調査に至る経過

遺跡は白石川が阿武隈川に合流する地点に近く，白石川が形成した河岸段丘上にある。段丘の南東方向には白石川をはさんで阿武隈川と白石川の作り出した沖積平地が展開している。この平地の中を東北本線，国道4号線が通過しているが，白石川にかかる国道4号線の白幡橋より船岡，大河原までは旧国道の改修が行なわれたが道路幅も狭く，市街地を通過するため，交通が渋滞しがちである。そのため建設省東北地方建設局では，この交通渋滞を緩和するための白石川の北西岸を通る柴田バイパスを計画した。

東北地方建設局仙台工事事務所の依頼によって，昭和48年春，柴田バイパス予定地内について分布調査を実施し，当，土平遺跡がバイパス法線敷内にかかることがわかった。土平遺跡は周知の遺跡で，「柴田町の文化財，第5集」にも記載されている。遺跡は，石器類が採集されていることや縄文時代中期の土器片などがあることから縄文時代の遺跡として知られていた。土師器，須恵器の破片も若干出土していた。遺跡の位置する地点は，一部は畑として耕作されていたが，大部分は荒地でススキが茂り，数回の分布調査の結果でも，遺跡の的確な性格は把握できなかった。この間，仙台工事事務所と交渉を重ね，発掘調査に要する費用を原因者で負担することとして，記録保存のための発掘調査を実施することにした。

昭和49年度に入って，遺跡の一部を破壊して建築した東北リコー株式会社職員研修所の残材及び砕石が発掘調査予定地内に置かれていたため，文化財保護課，仙台工事事務所，東北リコー株式会社の職員立合いのもとにとの撤去作業をすすめた。なお，仙台工事事務所秋葉氏，柴田町教育委員会鎌田氏をわずらわして，数回にわたって発掘のための現地調査を実施した。

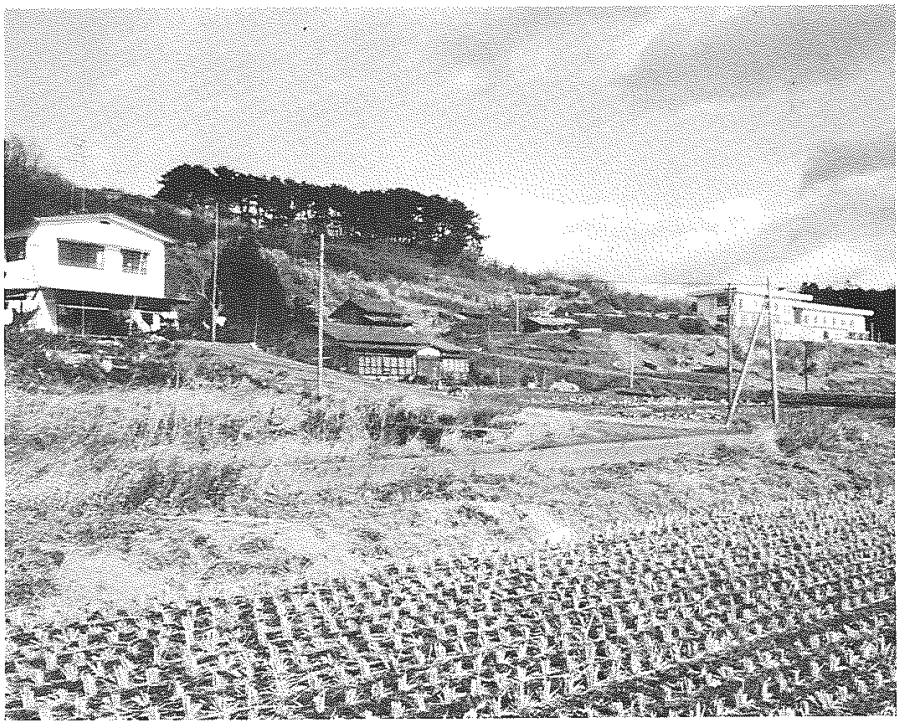
昭和49年10月3日，宮城県知事と東北地方建設局長との間で，調査費総額500万円で委託契約を締結し，昭和49年10月14日より当遺跡の発掘調査を実施したものである。

Ⅱ　位置と環境

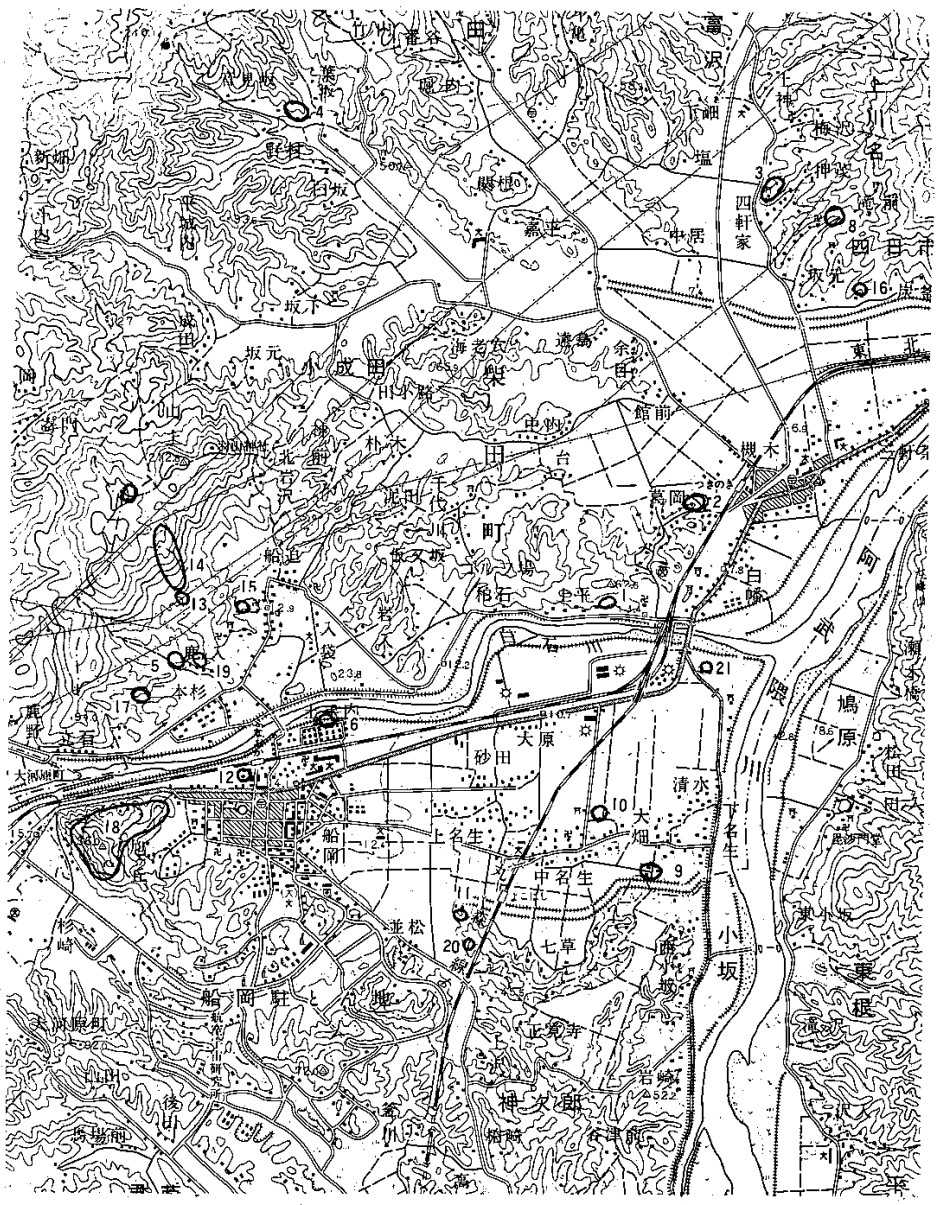
1. 位置と自然環境

土平遺跡は柴田町の南部，東北本線槻木駅より南西に約3kmの，柴田町船迫字土平にある。柴田町南部では，白石川が西から東へ流れ，阿武隈川に合流し，広い沖積平野を形成している。

これらの川の背後には平野をはさむように丘陵地帯が続いている。川の合流地点の西側には，名取市西部から続く高館丘陵の南端から分枝した2つの小丘陵が東方にのびている。このうち南側の小丘陵の南麓に沿って，白石川によって形成された段丘面が続いている。この段丘面上に土平遺跡は立地している。中央部はゆるやかな斜面であり，標高約30m，南の水田面との比高約10mである。東・西側には浅い沢が入り込み，北・南側は急な斜面となる。現状は畑地および雑木林である。南方すぐ目の前を白石川が流れている。遺跡の範囲は台地中央部から東西の沢にかけて南北約50m×東西約100mである。なお台地の南東部は近年土取等によって削平され，遺跡の一部はすでに失なわれているものと思われる。



写真Ⅰ　遺跡遠景（南西より）



1 土平遺跡
2 松崎貝塚
3 上川名貝塚
4 薬坂戸ノ内遺跡
5 鹿野遺跡
6 大橋遺跡
7 上野遺跡
8 川名沢遺跡
9 西田遺跡
10 宮前遺跡
11 船岡迫遺跡
12 川原遺跡
13 寺後遺跡
14 寺後古墳群
15 森合横穴古墳群
16 炭釜横穴古墳群
17 兎田遺跡
18 四保館跡
19 土合横穴古墳群
20 船岡迫横穴古墳群
21 剣塚古墳

第1図　土平遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

柴田町内では現在89ヶ所の遺跡が発見されている。その中で最も古いのは縄文時代のもので，町中央部には松崎・上川名貝塚をはじめとする県内有数の貝塚群がみられる。

弥生時代のものでは上野遺跡・寺後遺跡などが知られている。

古墳時代前半に属する古墳は今のところ発見されていないが，川名沢，川原，西田遺跡などでこの時期の遺物が出土している。町内で古墳がみられるのは古墳時代後半になってからであり，寺後古墳群，森合・炭釜横穴古墳群などが知られている。

寺後古墳群は小円墳が群集しており，径6m・高さ1.7mほどのものが多い。多数の山石を積み上げて構築し，主体部は横穴式石室と思われるものがある。森合横穴古墳群は100基以上あり，個々のものは小規模で簡略化された造りである。炭釜横穴古墳群は50～60基と推定され，調査によって多数の遺物が出土している。

平安時代になると遺跡数はかなり増加する。県教委で発掘した葉坂戸の内遺跡では竪穴住居跡が4軒発見されている。また兎田遺跡などでは布目瓦が出土している。

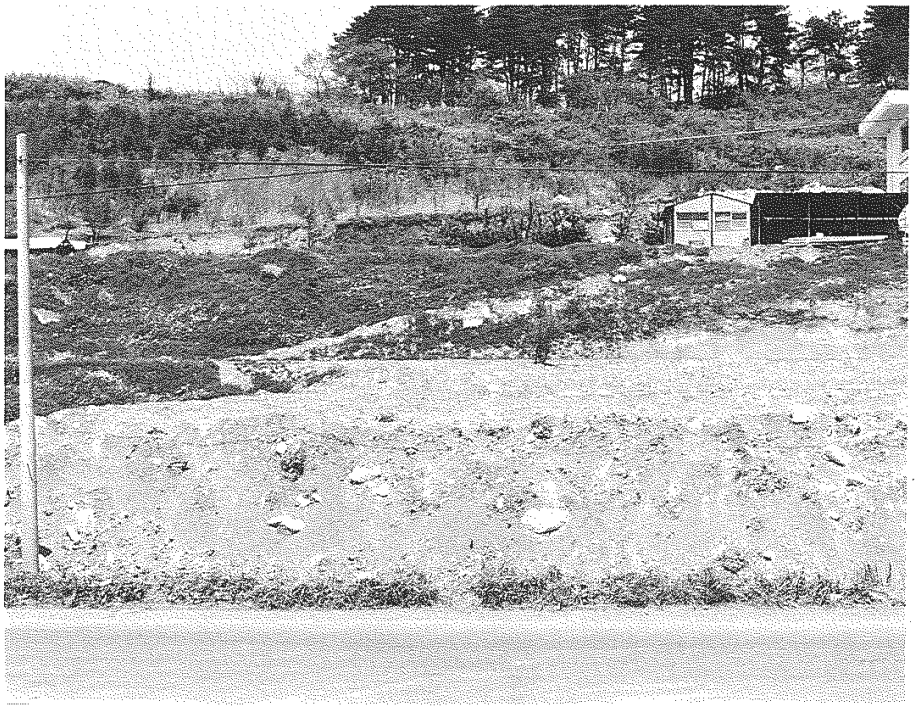


写真２　遺跡近景（南より）

Ⅲ　調査の経過

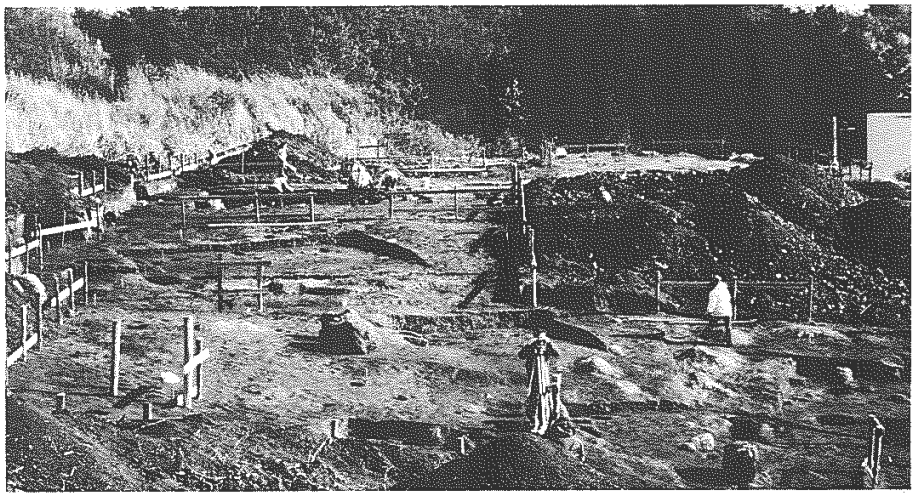
遺跡の範囲内で柴田バイパスの路線敷となるのは，約40×100m，4,000m^{2}である。また路線外の遺跡南西部約15×40m，600m^{2}の畑地はバイパス完成後破壊の危険性が強いため，東北地建の了解を得て範囲に加え，あわせて約4,600m^{2}を調査の対象とした。これは，路線敷が北側の急斜面まで及び，路線外の南東部はすでに削平されているので，遺跡のほとんど全体を含む。

発掘調査は，昭和49年10月14日に開始し，12月26日に終了した。なお調査途中の12月16日に

写真３　調査開始時の状況　　上：北部より南西をみる
下：西部より東をみる

は現地説明会を開催し，調査成果の一部を一般に公開している。

調査区域全体に3m方眼の区を設定し約2,840m²を発掘した。調査区南東部では地山が露出しているが，他の部分では表土下に，3層に大別される遺物包含層がみられ，深いところでは1mを越える。遺構は遺物包含層第3層および地山の上面より竪穴住居跡，掘立柱建物跡などが検出されている。遺物は縄文土器，石器，土師器，須恵器などが出土している。



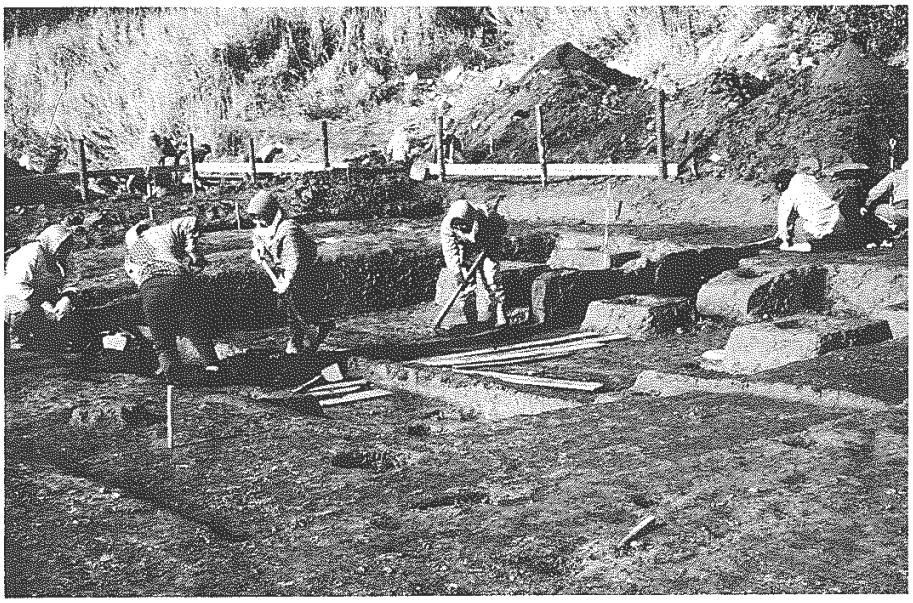
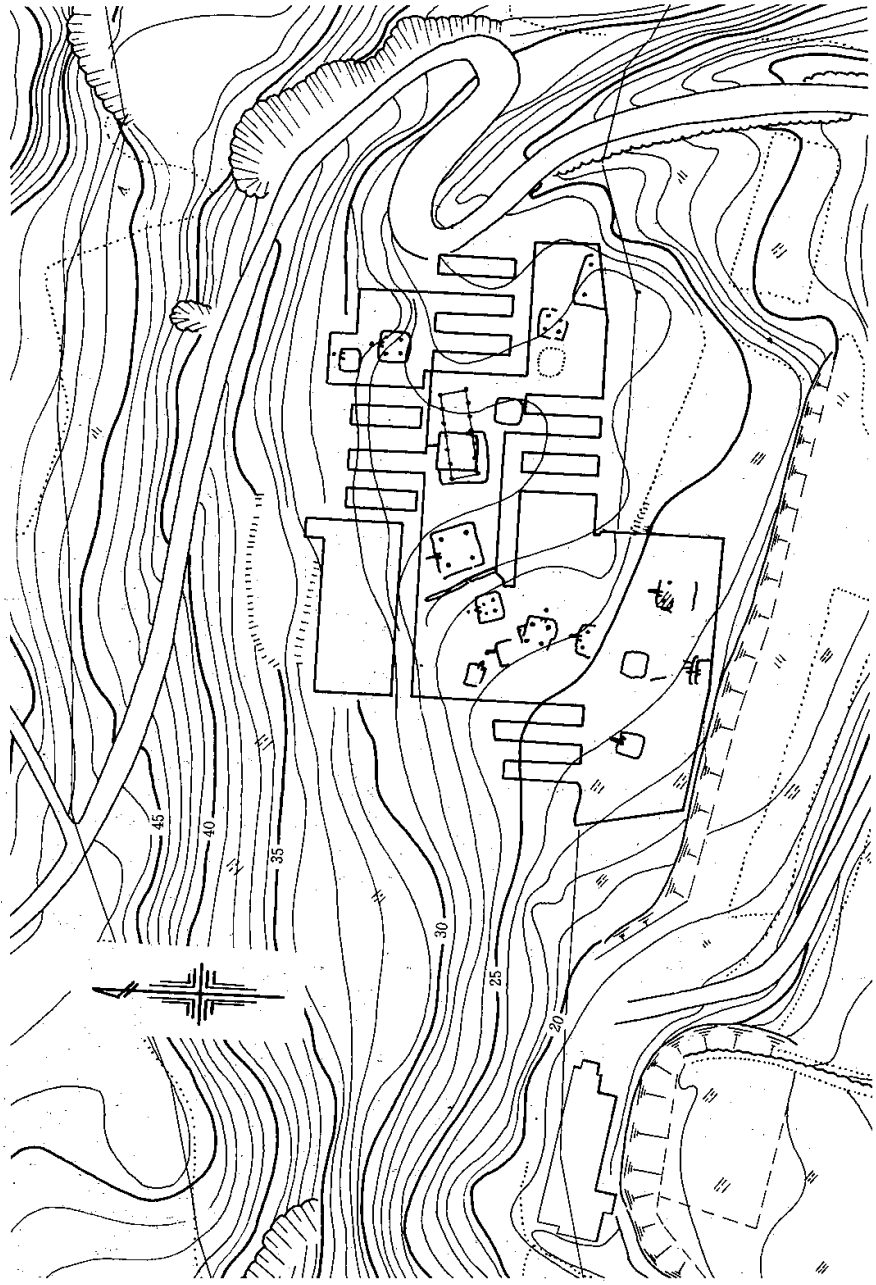


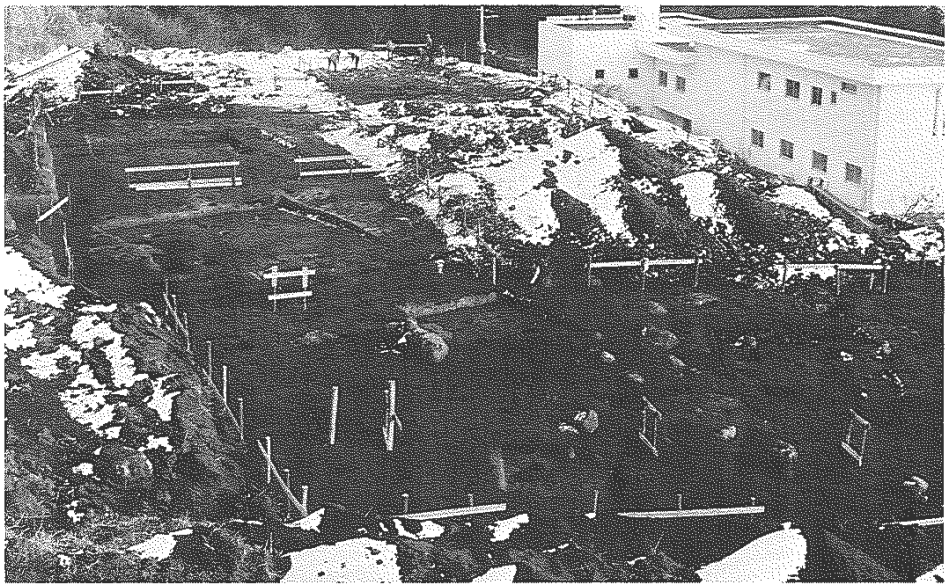
写真 4　発掘状況



第２図　グリット配置図　（縮尺１：1000）

Ⅳ　調査の成果

今回の調査では，遺物包含層や竪穴住居跡，掘立柱建物跡，溝，ピットなどの遺構と，縄文土器，石器，土師器，須恵器などの遺物が発見されている。



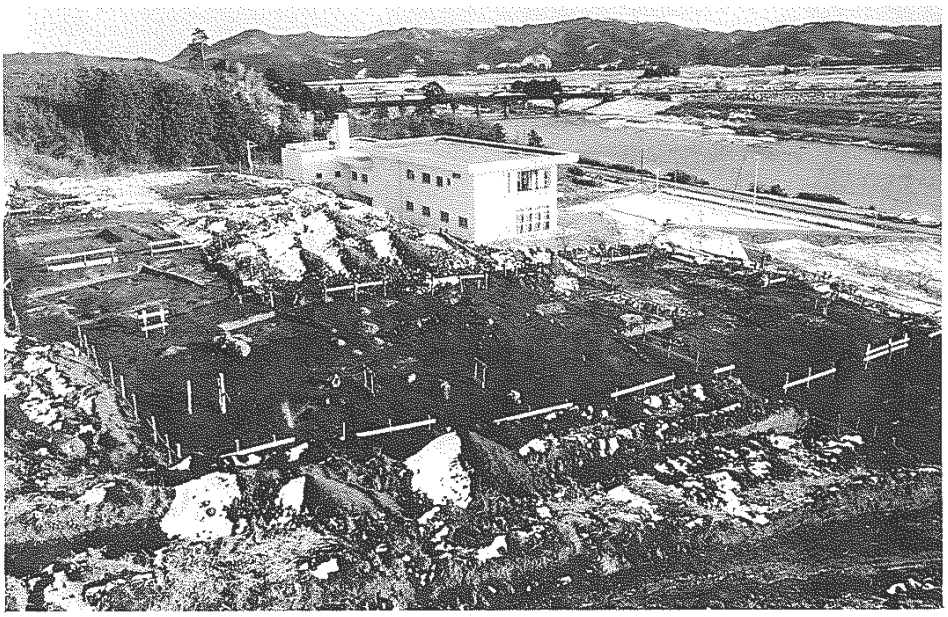


写真５　遺構の状況

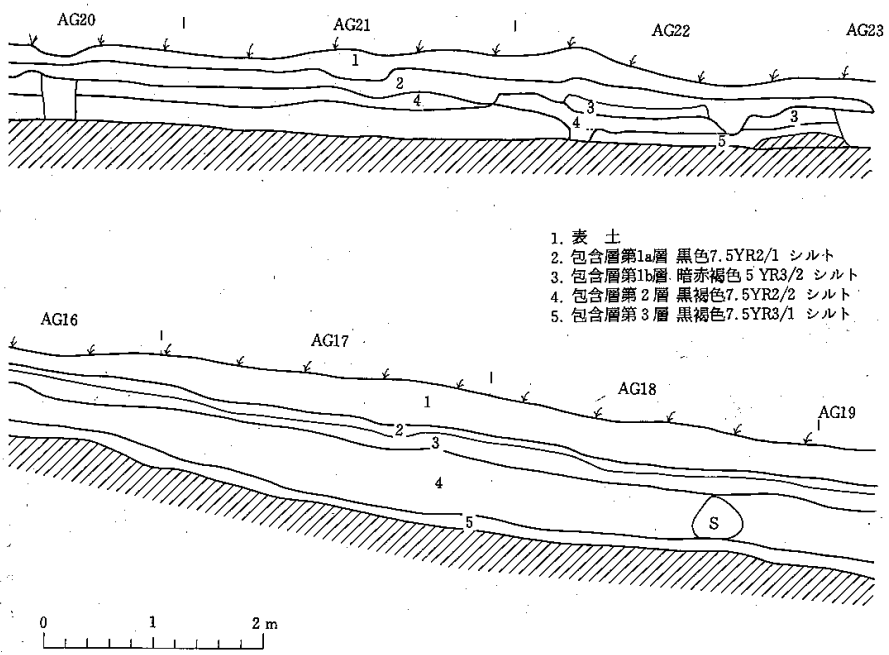
これらの遺構，遺物についての整理は現在あまり進んでおらず，特に遺物についてはほとんど手をつけていない。このため今回の概報では遺構の主なものについて発掘時に観察された特徴を中心として説明し，全ての遺構と遺物の詳細については本報告にゆずることにしたい。

1. 遺物包含層

遺物包含層は調査区域の西半から北東部にかけてみられる。北辺の山際，西半の沢の部分には厚く堆積しており，最も厚い所では1mを越える。

層位は3層に大別され，いずれもほぼ全体に堆積している。第1層は黒褐色のシルトで最も硬く，焼土・炭化物を少量含んでいる。第2層は暗褐色のやや砂質のシルトであり，第1層の次に硬い。黄色粘土の粒・焼土・炭化物を含んでいる。西にいくに従って黒味を増す。第3層は黒色のシルトで軟かく水分が多い。焼土・炭化物を少量含む。検出された住居跡の一部は第3層上面あるいは第3層途中で確認されている。

遺物は第1・2層からは縄文土器，石器，土師器，須恵器が混在して出土している。第3層からは縄文時代前期後半，中期，後期初頭の土器や石器が出土した。



第3図　遺物包含層セクション図

2. 竪穴住居跡

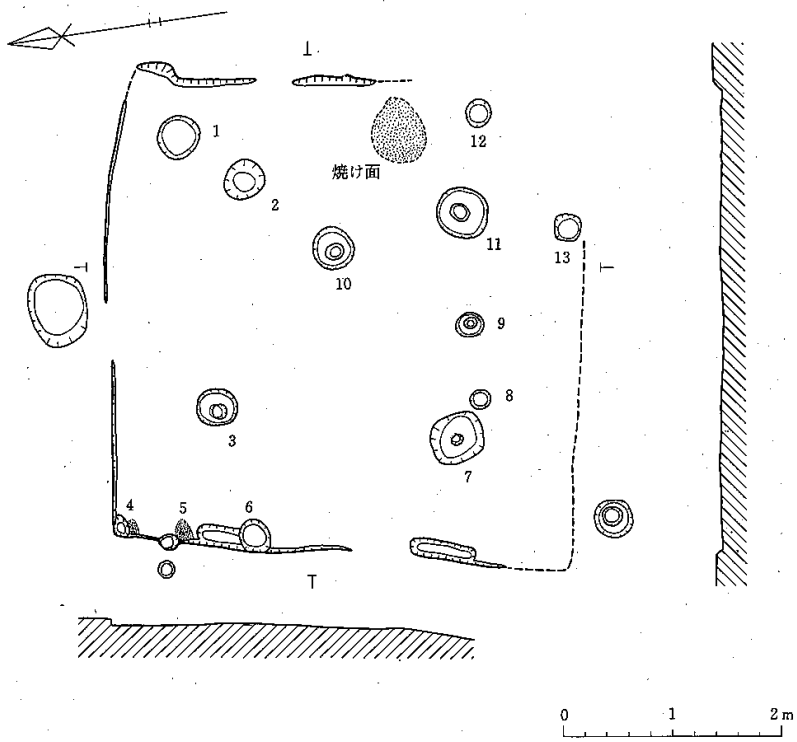
竪穴住居跡は21軒検出されている。遺構の輪郭は包含層第3層と地山とから確認されたものとがある。住居跡群は西側の沢から中央部の山際，さらに東南部へと半円を描いて続いている。

第1号住居跡

東西4.2m×南北4.2mのほぼ正方形のプランをもつ住居跡である。遺構は地山面で確認されている。東西壁の南半および南壁はすでに失なわれているが，住居の掘り方の範囲から輪郭が推定される。壁高は高い所で約5cmである。

床面は凝灰質の地山であり，そのためかごく硬い。上面は多少のよごれがみられ，細かな凹凸がある。東壁中央近くの床面の一部が焼けている。ピットは12個みられる。これらの中でピト2・3・7・11の4個は互いに対を成してほぼ対角線上に位置し，うち3個は掘り方と柱痕が区別されているし，主柱穴の可能性が強い。

他の施設としては西壁画下に短い溝がみられる。



第4図　第1号住居跡

写真６　第Ｉ号住居跡

第6号住居跡

南半はすでに削平されて現存せず，東西4,60m×南北の現存長2,40mであるが原形は正方形に近いプランをもつものと思われる。遺構は地山面で確認されている。壁高は北壁で40cm，南端部で10cmありほぼ垂直に立ち上がり，保存は良好である。

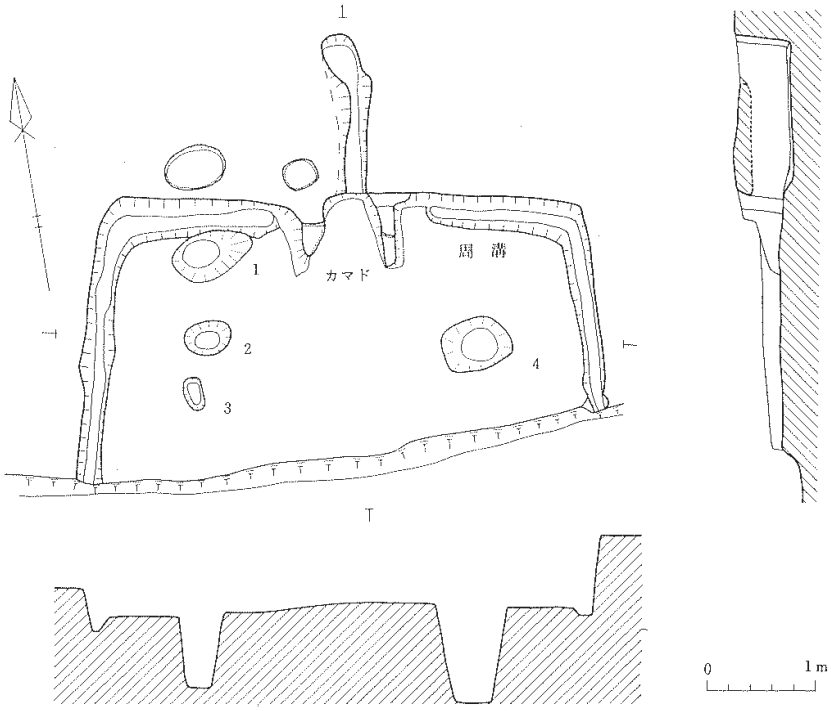
床面は中心部分ではたたきしめられたようなごく硬い面で，細かな凹凸がみられる。その周囲のカマド周辺や壁沿いは，面として検出できるがごく軟かい。

ピットは4個みられる。掘り方と柱痕の区別できるものはない。このうちピット2・4はほぼ相対する位置にあり主柱穴の可能性がある。

カマドの部分を除いて，壁直下に周溝がみられる。底面，壁面ともほぼ平坦である。

カマドは北壁中央部にある。本体は天井部がすでになく，両袖が残っている。袖は左右とも保存が良い。内部は燃焼部の底面から側壁にかけて熱を受け赤変し硬い。煙道は本体奥壁から外方に約1.5mのびる。トンネル状に地面をくり抜いており，先端に煙り出しの穴がみられる。

カマド左側にピットがある。埋土に焼土・炭化物が混じっている。貯蔵穴の可能性がある。



第5図　第6号住居跡

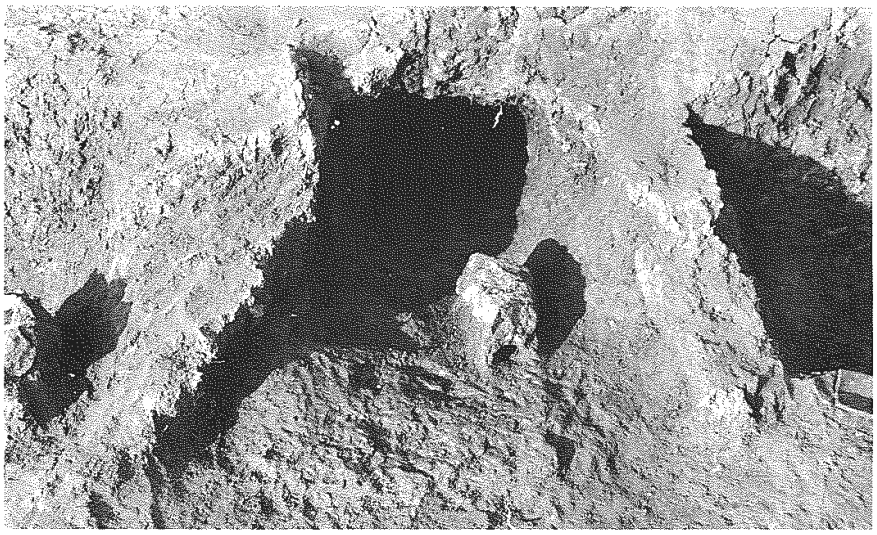


写真7　第6号住居跡カマド

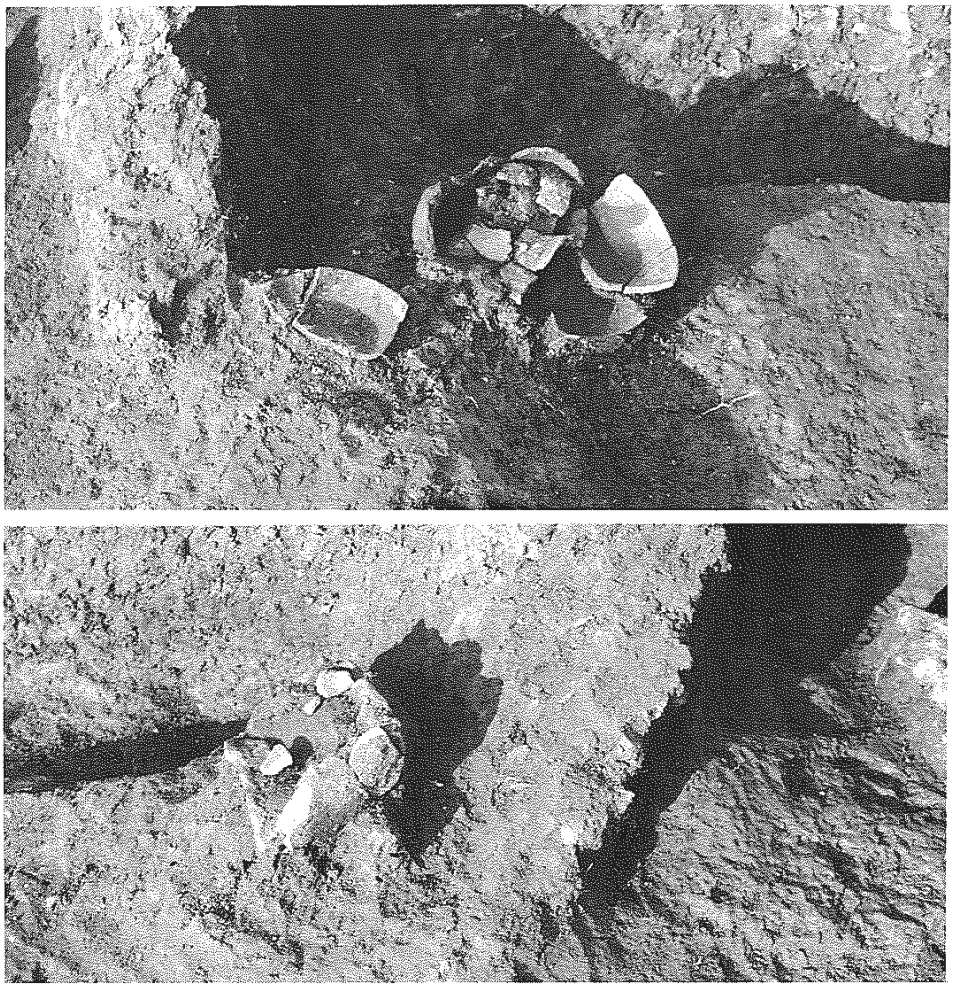


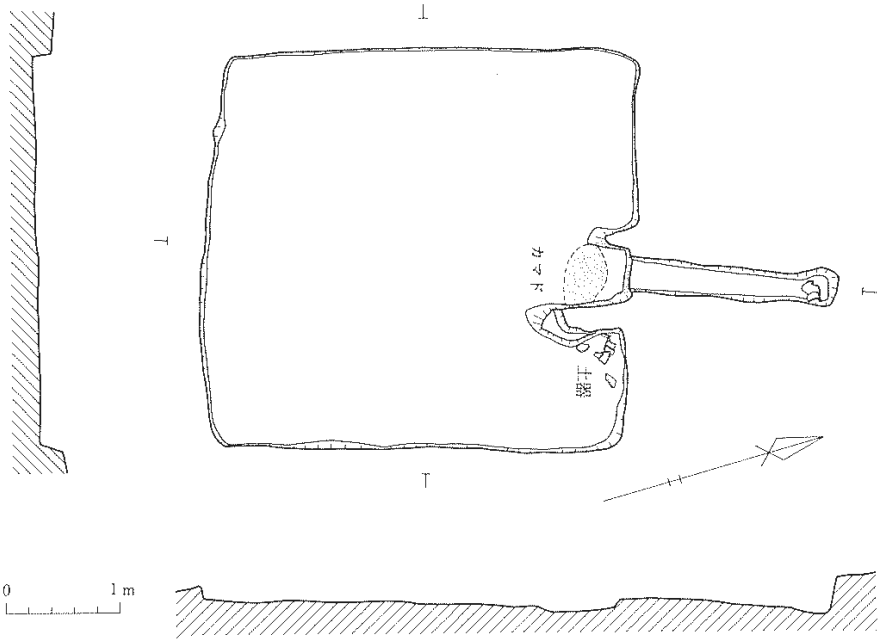
写真 8　第 6 号住居跡遺物出土状況

第10号住居跡

東西3.5m×南北3.6mのほぼ正方形のプランをもつ住居跡である。遺構は地山面で確認されている。壁高は北壁で20cm，南壁で10cmあり，ほぼ垂直に立ち上がり保存は良好である。

床面は全体的にやや軟かい。ピットは全くみられない。

カマドは北壁中央部にある。本体は袖が残存している。両袖は竪穴を掘り込む際に地山を掘り残して造られている。内部は燃焼部の底面から側壁にかけて熱を受けて赤変し硬い。煙道は本体奥壁から外方に1.6mのびており，現状は溝状を呈す。先端部に煙り出しの穴がみられる。



第６図　第10号住居跡

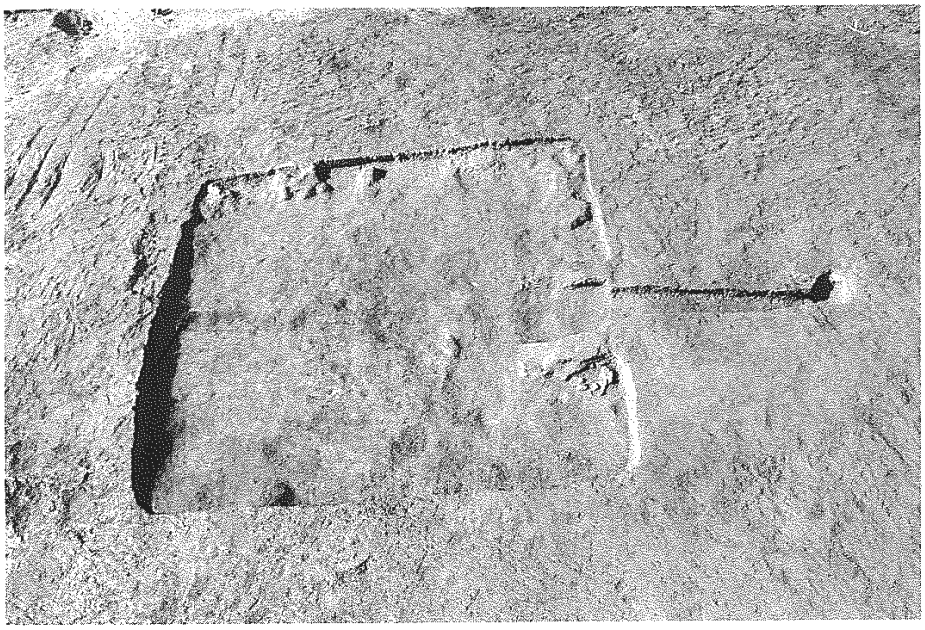
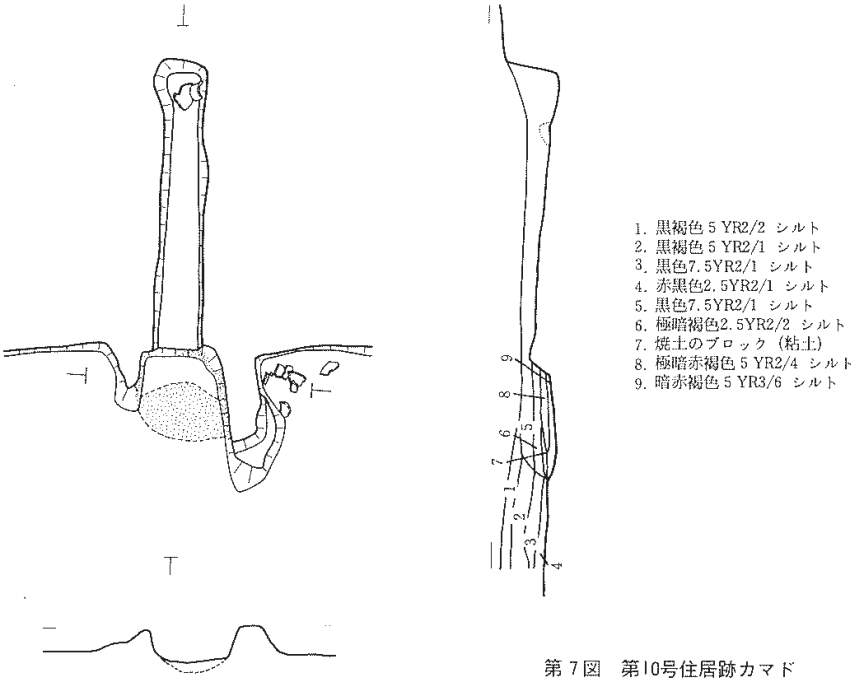


写真９　第10号住居跡

写真10　第10号住居跡カマド



第７図　第10号住居跡カマド

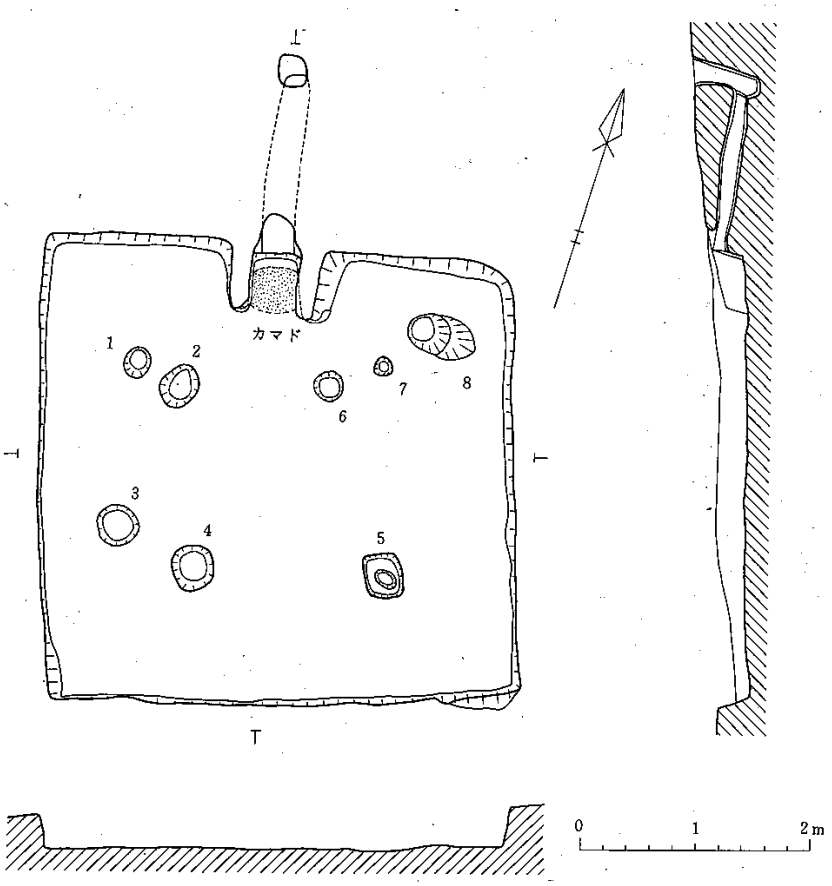
第12号住居跡

東西4m×南北3.8mのほぼ正方形のプランをもつ住居跡である。遺構は遺物包含層第3層上面で確認されている。壁高は北壁で約40cm，南壁で約30cmあり，立ち立がりは垂直に近く保存は良い。

床面は中央部ではたたきしめられたように硬く，細かな凹凸がみられる。周辺はやや軟かく凹凸が多い。

ピットは8個ある。このうちピット2・4・5・7は互いに対をなしてほぼ対角線上に位置するので主柱穴の可能性が強い。

カマドは北壁中央部にある。本体は両袖が残っている。袖の保存は良好である。内部は燃焼部の底面から側壁にかけて熱を受け赤変し硬い。煙道は本体奥壁からトンネル状1.7m外側にのびている。先端に煙り出しの穴がみられる。



第8図　第12号住居跡

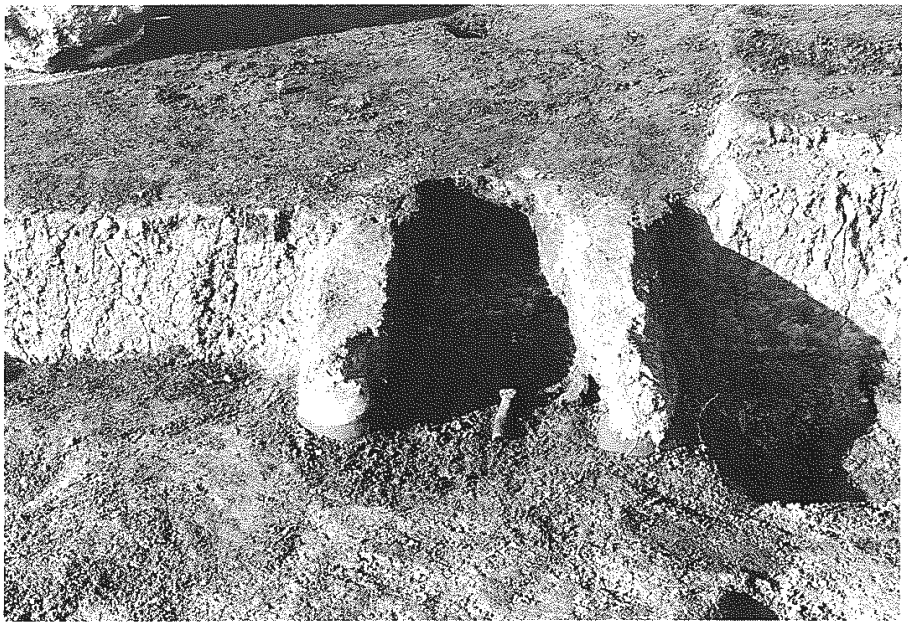
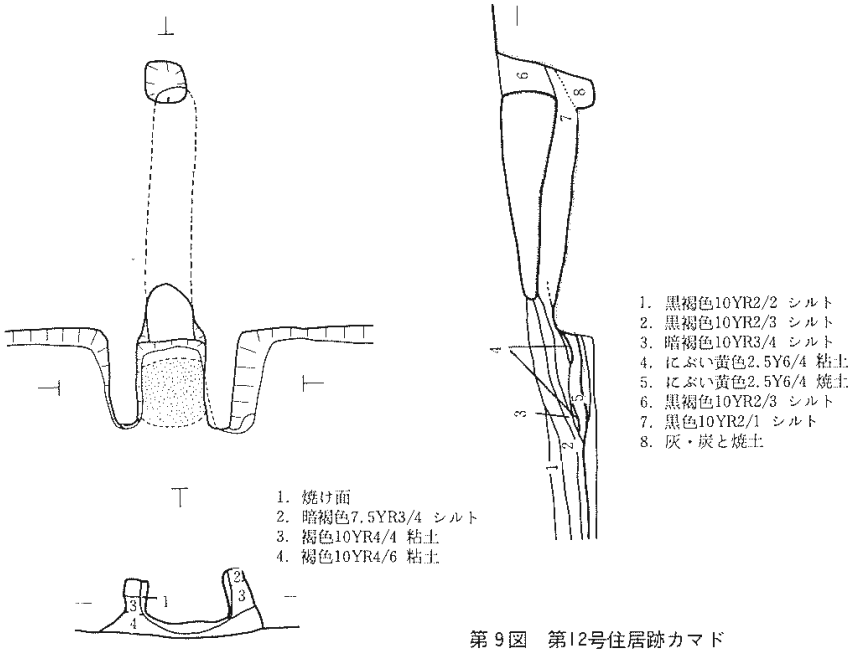


写真11　第12号住居跡カマド



第９図　第12号住居跡カマド

第13号住居跡

東西6.8m×南北6.7mのほぼ正方形のプランをもつ住居跡である。遺構は地山面で確認されている。壁高は東壁で約30cmであるが，西壁は検出できなかった。現存する壁はほぼ垂直に立ち上がり保存は良好である。

床面は全体にほぼ平坦で西辺以外では硬い。床面西辺にみられる細長い落ち込みは，床面の軟かい部分を掘り過ぎてしまったものである。

ピットは6個みられる。このうちピット1・4・9・14は，互いに対を成してほぼ対角線上に位置するので主柱穴の可能性が強い。

カマドは北壁中央部にある。天井部はすでに失なわれて袖が残っている。両袖とも保存は良い。内部は燃焼部底面から側壁にかけて熱を受けて赤変し硬い。燃焼部の奥には土師器小形甕が逆さにふせた状態で発見された。支脚として使用されたものと思われる。煙道は本体奥壁からトンネル状に約1.3m外側にのび，先端に煙り出しの穴がみられる。

カマド右側にピット16がある。堆積土に焼土・炭化物がまじる。貯蔵穴の可能性がある。

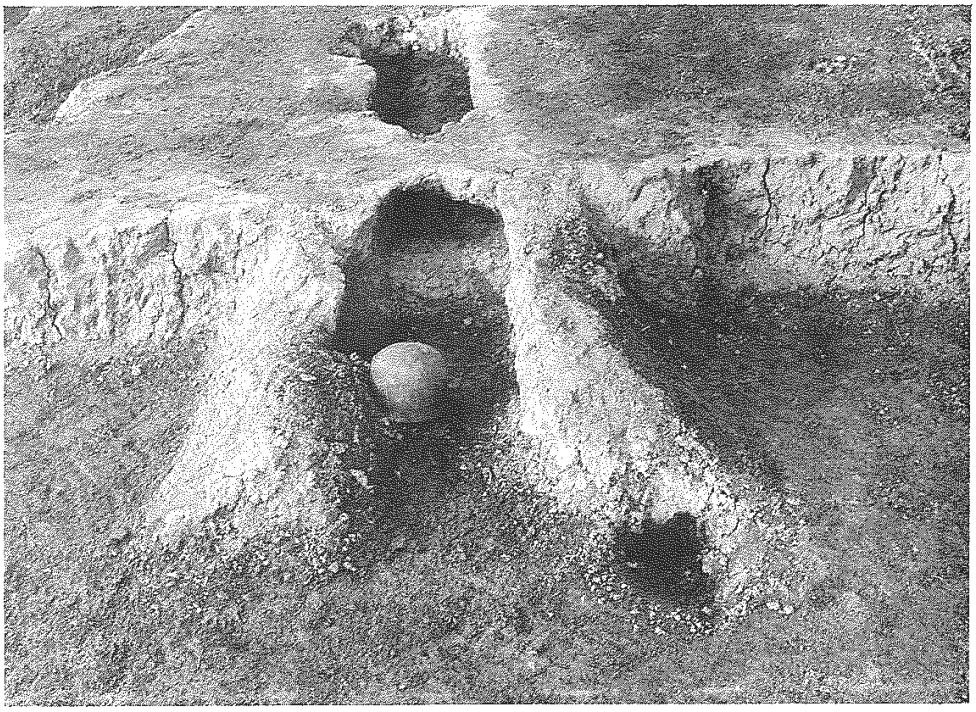
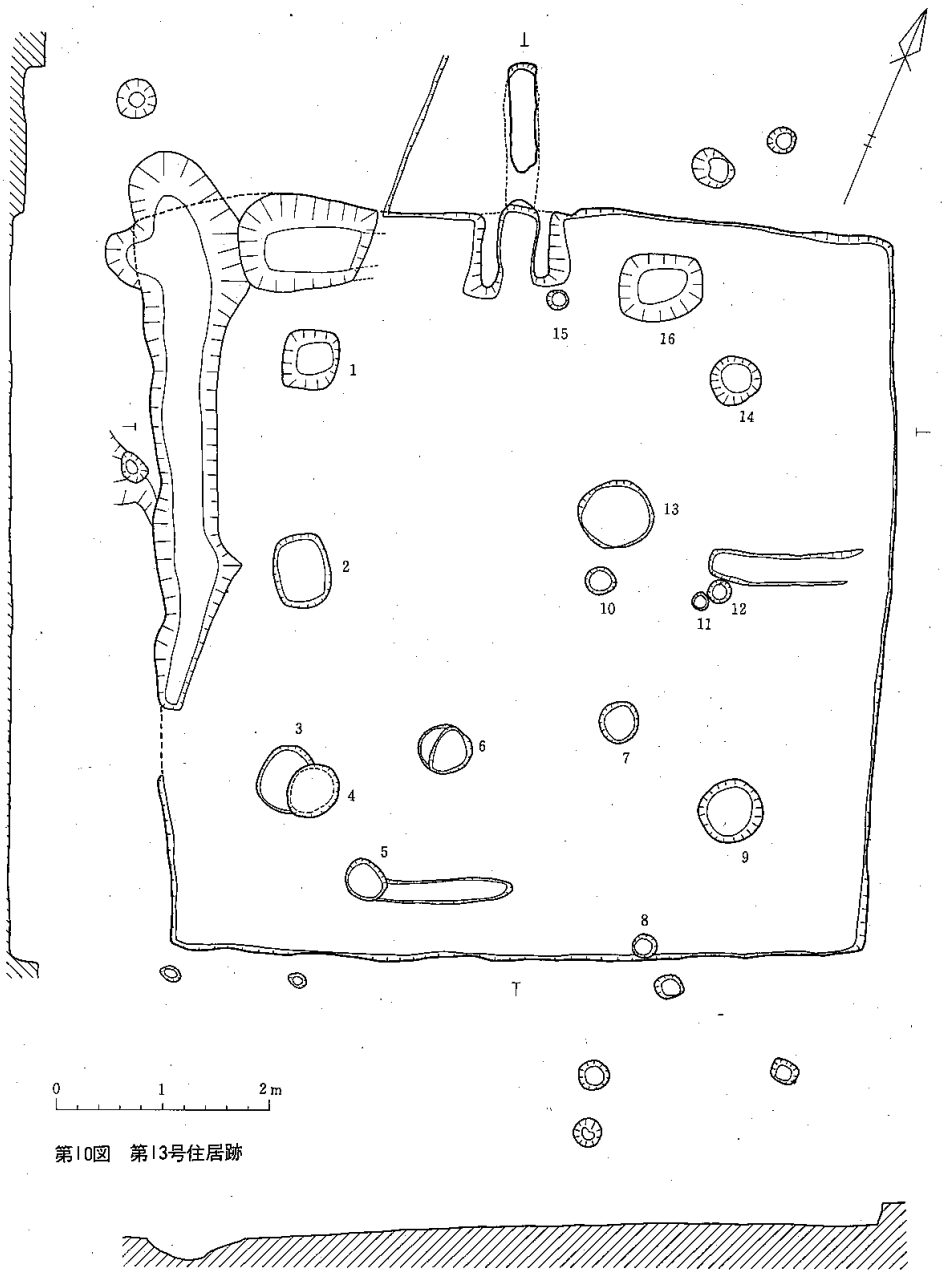


写真12　第13号住居跡カマド



第10図　第13号住居跡

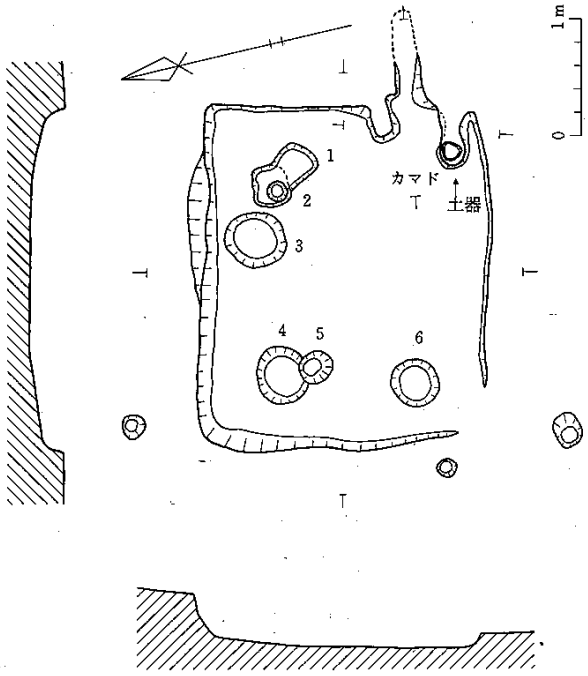
第14号住居跡

東西2.8m×南北2.3mのやや長方形のプランをもつ住居跡である。遺構は遺物包含層上面より確認されている。壁は大部分が包含層第3層の上で，北端下端だけが地山の土である。壁高は北壁で約30cm，南壁で約6cmある。ゆるやかに立ち上がり，保存は良好である。

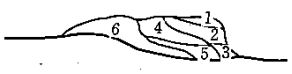
床面は全体にやや軟かい。周辺が高く中央部が低い皿形をしており，最も高低差のある部分では30cm以上の差がある。

カマドは東壁の南よりにある。本体の右端基部は南壁にほぼ接している。天井部はすでになく袖が残っている。両袖とも保存は良くない。両袖とも暗褐色ないし黒褐色のシルト質の土で構築されており，右袖の先端部は土師器の甕で補強している。本体内部には熱を受けたような面は全くみられない。煙道は本体奥壁から外側に約40cmのびる。現状は溝状を呈し，先端部は削平され残存しない。

ピットは6個ある。掘り方と柱痕の区別できるものはない。この中でピット2・4・6はほぼ対角線上に位置しており，主柱穴の可能性が強い。



第11図　第14号住居跡

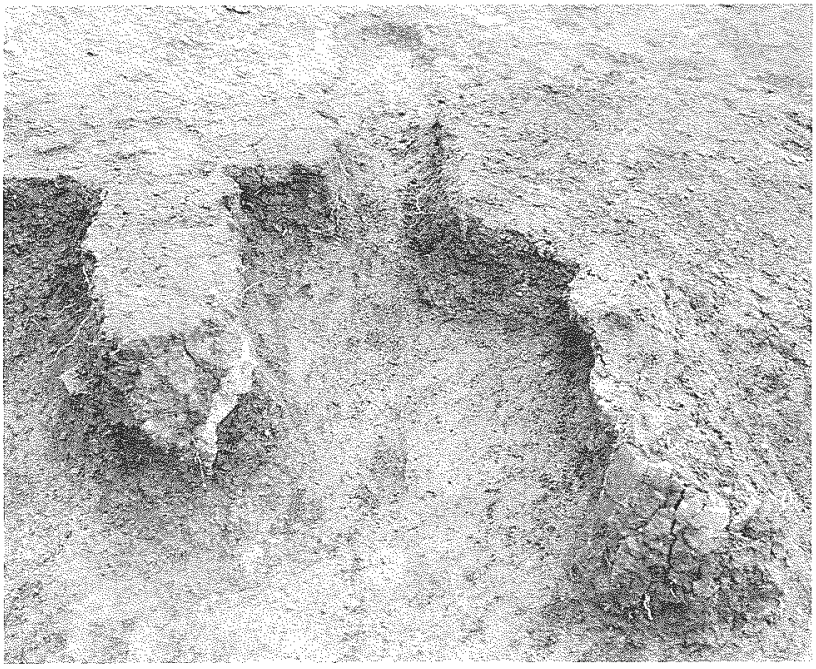


埋土層位
1. 黒褐色10YR2/3 シルト
2. 黒褐色10YR2/2 シルト
3. 黒褐色7.5YR2/2 シルト
4. 暗赤褐色 5 YR3/2 シルト
5. 黒褐色 5 YR2/2 シルト
6. 黒褐色 5 YR2/1 シルト

横断面
1. 黒褐色10YR2/3 シルト
2. 暗褐色10YR4/3 シルト

第12図　第14号住居跡カマド

全体



カマド

写真13　第14号住居跡

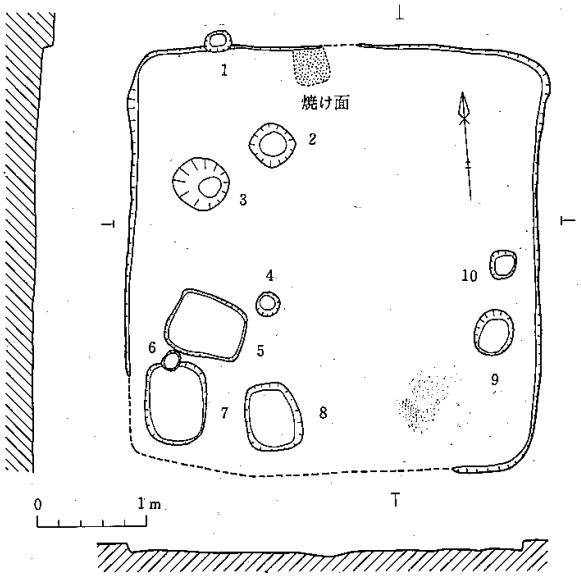
第17号住居跡

東西3.7m×南北3.9mのほぼ正方形のプランをもつ住居跡である。遺構は凝灰質の地山面で確認されている。西壁の南端と南壁の大部分はすでに失なわれている。壁高は北壁で約8cmある。

床面は全体に平坦でごく硬い。地山が凝灰質であることによるものと思われる。

ピットは10個みられる。いずれも掘り方と柱痕の区別ができず，位置からも主柱穴らしいものはない。

北壁中央部付近では，床面の一部に焼けている部分がみられる。何ら他に施設は伴なわない。



第13図　第17号住居跡

写真14　第17号住居跡全体

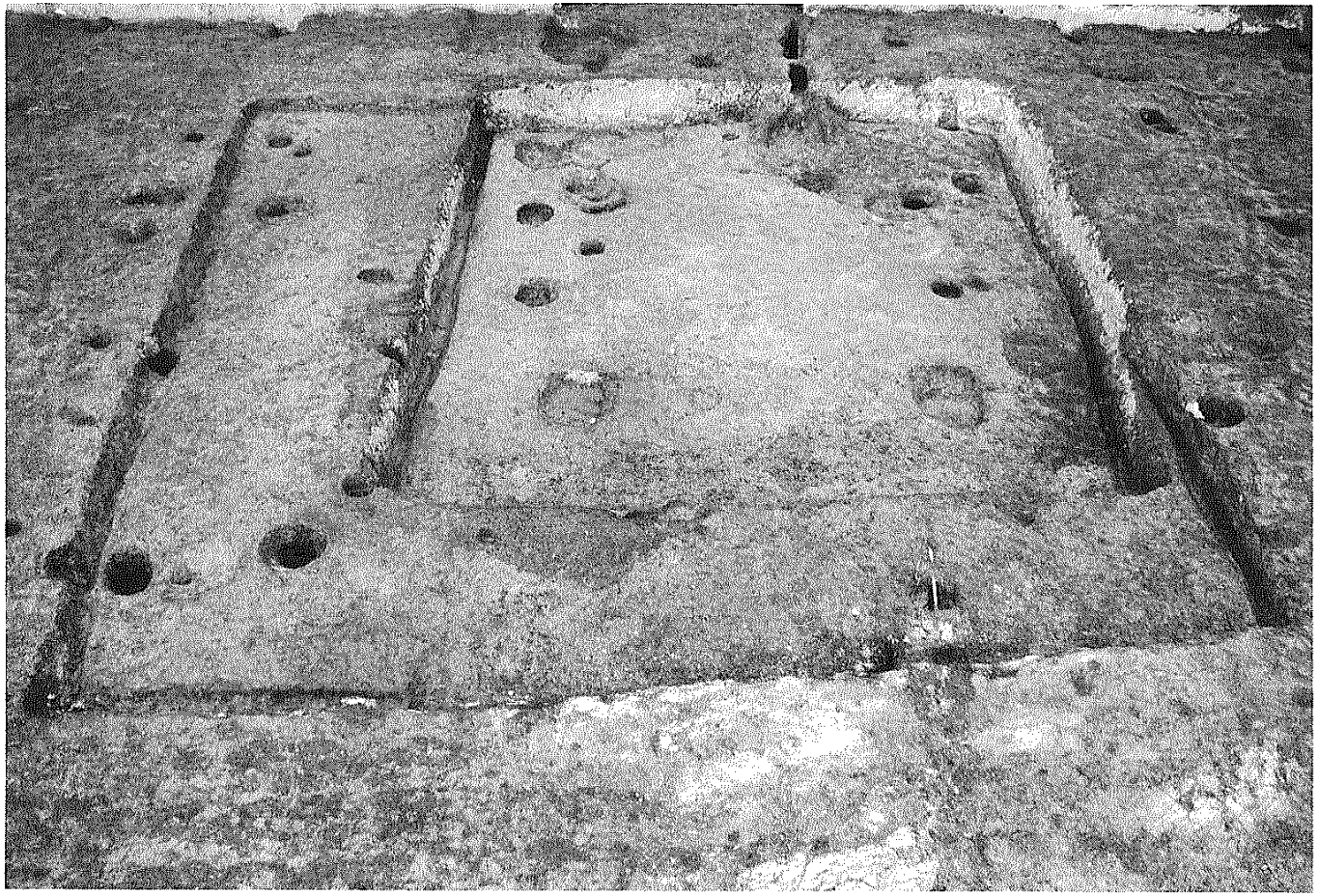
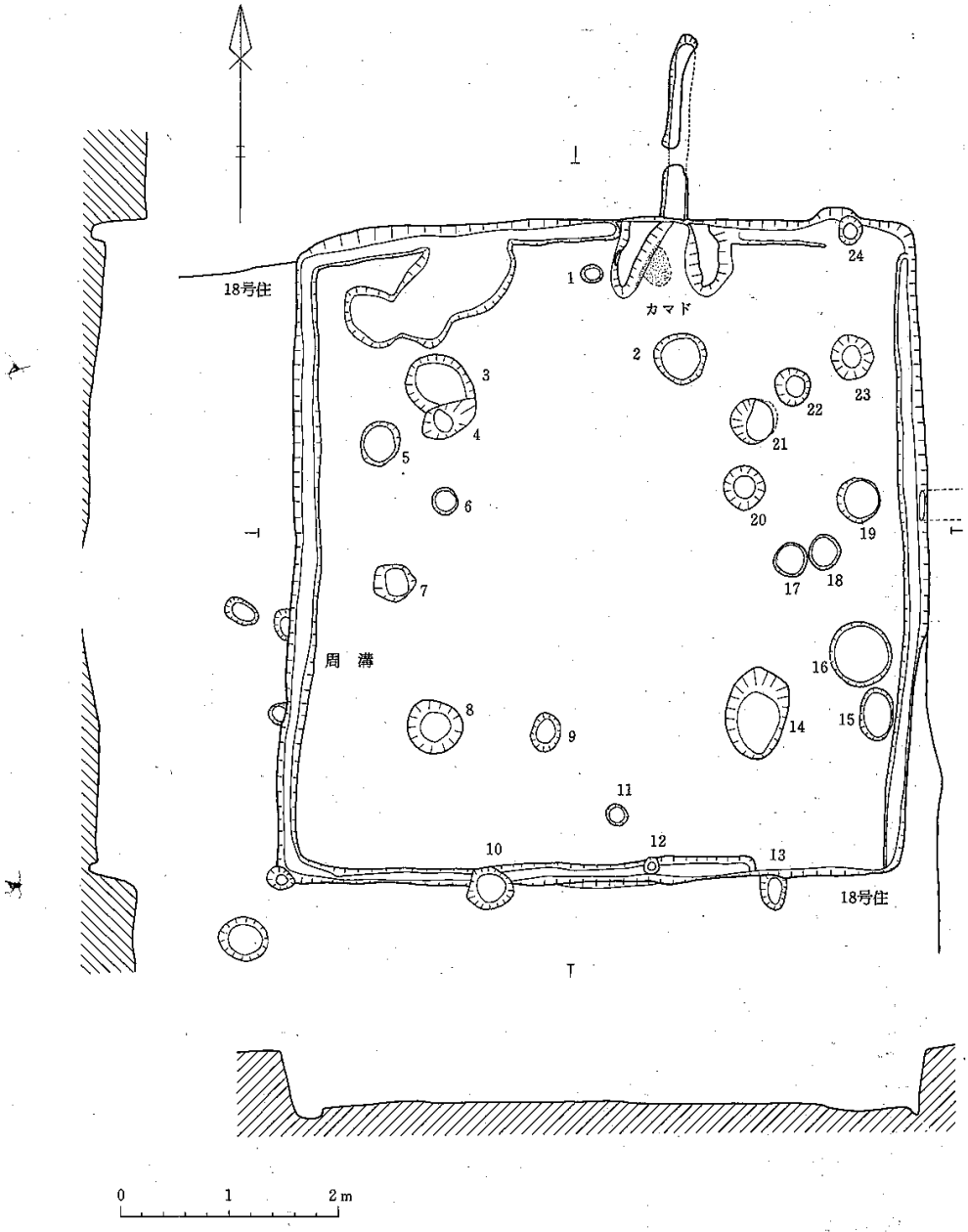


写真15　第19号住居跡



第14図　第19号住居跡

第19号住居跡

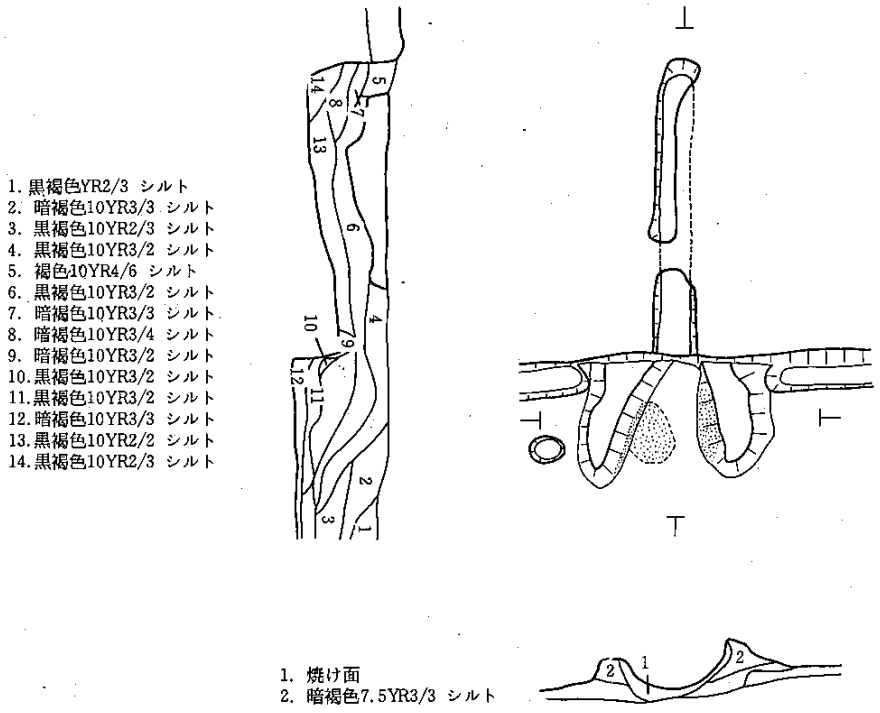
東西5.7m×南北5.9mのほぼ正方形のプランをもつ住居跡である。第18住居跡を切っており，これより新しい。遺構は地山面と第18住堆積土上面で確認されている。壁高は北壁で約50cm，南壁で約40cmあり，ほぼ垂直に立ち上がり保存は良好である。

床面は全体に平坦で硬い。厚さ約5～10cmに暗褐色土を用いて貼り床としている。

ピットは21個みられる。このうちピット3，8，14，22は互いに対を成してほぼ対角線上に位置しており，主柱穴の可能性が強い。

カマドの部分と住居南東コーナー付近を除いて垂直下に周溝がみられる。

カマドは北壁中央部にある。本体は天井部がすでになく袖が残っている。両袖は黒褐色のシルト質の土で構築されており，保存は良好である。本体内部は燃焼部底面から側壁にかけて熱を受けて赤変し硬い。煙道は本体奥壁より外側に約1.2mのびている。地山をトンネル状にくり抜いており，先端に煙り出しの穴がみられる。



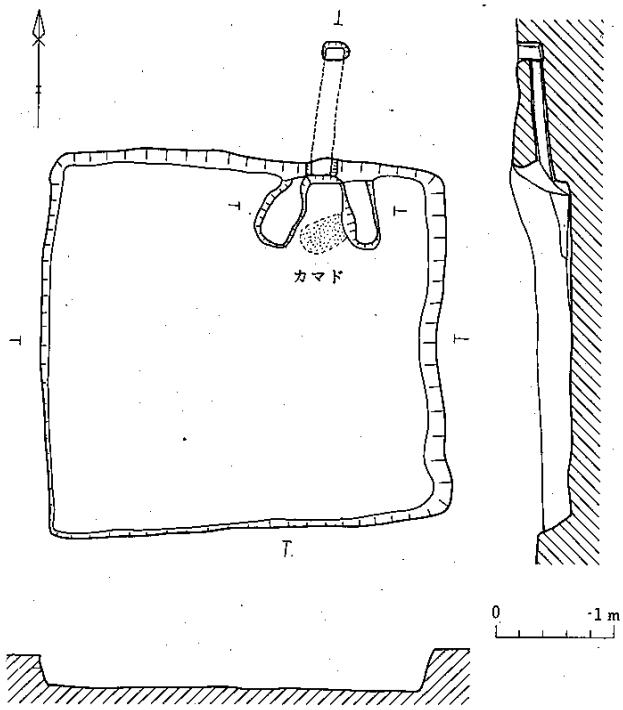
第15図　第19号住居跡カマド

第20号住居跡

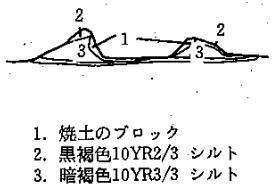
東西3.1m×南北3.0mのほぼ正方形のプランを持つ住居跡である。東壁がやや短い。遺構は遺物包含層第3層の途中で検出されたが，層位図では第3層上面より掘り込まれている。壁は上端が遺物包含層第3層の土で，それ以下は地山の土である。壁高は北壁で約30cmあり，ほぼ垂直に立ちあがる。全体に保存は良好である。

床面は全体に平坦で軟かい。ピットは全く見られない。

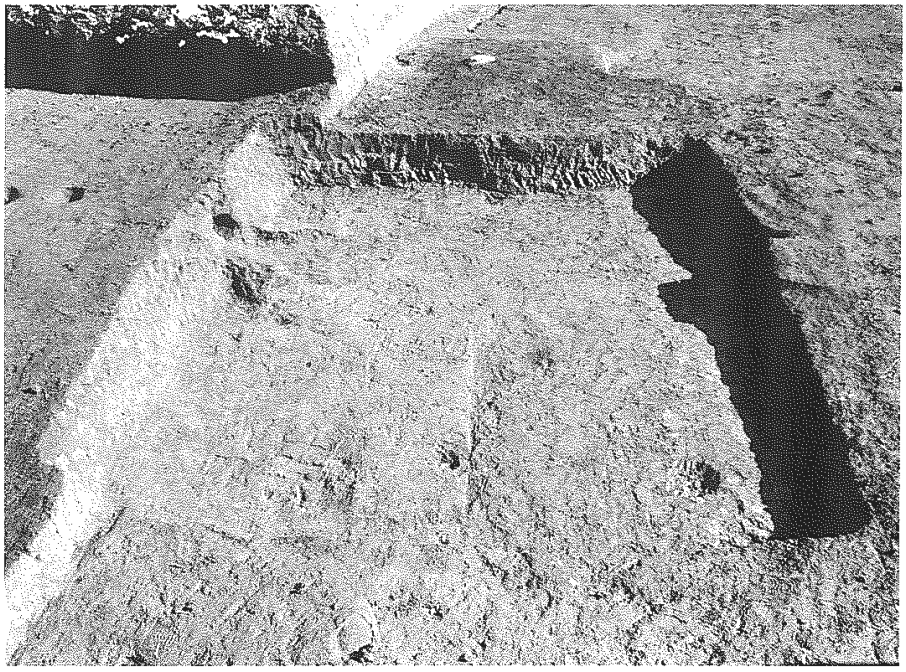
カマドは北壁中央やや東よりにある。本体は天井部がすでに失なわれており，袖が残っている。本体内部の堆積土に天井の崩落したらしい土層が見られる。両袖とも保存はあまりよくない。本体内部は，燃焼部の底面が特に硬く，熱を受け赤変している。側壁は部分的に焼けた面が残っている。両袖は竪穴を掘り込む際に地山を掘り残して構築された削り出しのものである。煙道は本体奥壁より外側に約1.1mのびている。地面をくり抜いたトンネル状のものであり，先端に煙り出しの穴が見られる。



第16図　第20号住居跡



第17図　第20号住居跡断面図



全体

カマド

写真　第20号住居跡

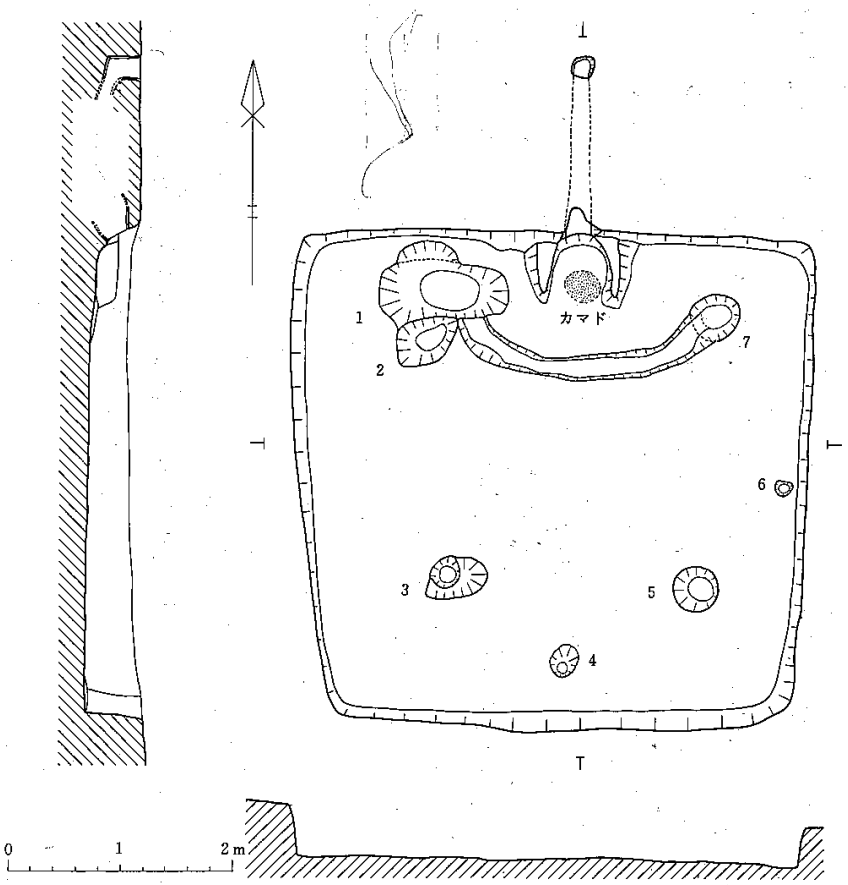
第21号住居跡

東西4.50m×南北4.40mのほぼ正方形のプランをもつ。遺構は遺物包含層第3層上面で確認された。壁は上半が遺物包含層第3層，下半が地山である。壁高は北壁で約45cm，南壁で約50cmあり，ほぼ垂直に立ち上がり，保存は良好である。

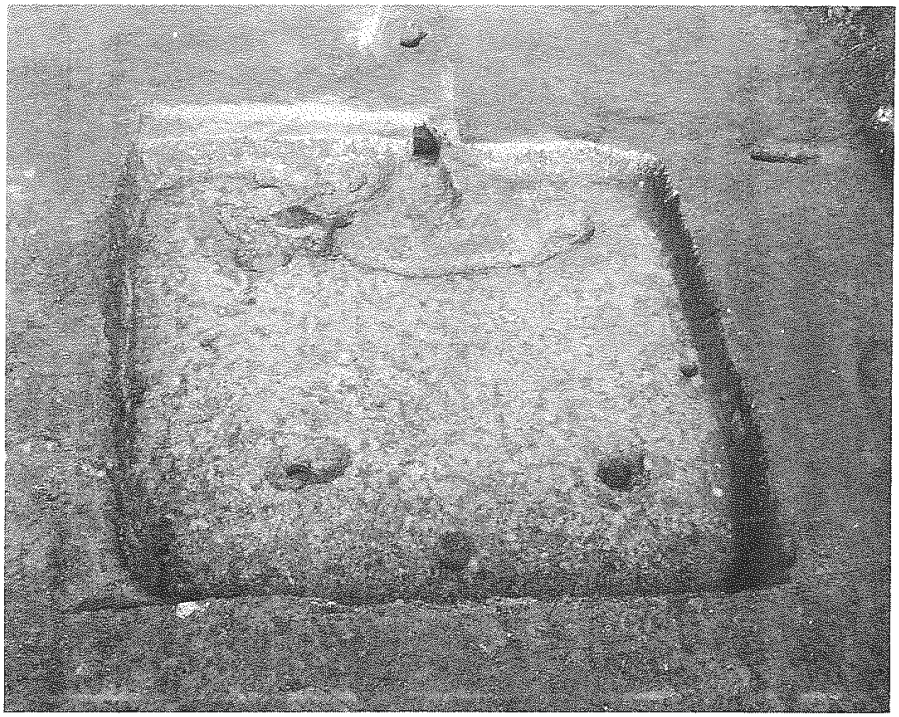
床面はほぼ平坦で硬い。ピットは7個ある。このうちピット2，3，5，7は互いに対を成してほぼ対角線上に位置するので主柱穴の可能性が強い。

カマドは北壁中央部にある。本体は天井部がすでになく，袖が残っている。本体内部は燃焼部底面から側壁にかけて熱を受けて赤変し硬い。煙道はトンネル状に約1.6mのび，先端に煙り出しの穴がみられる。

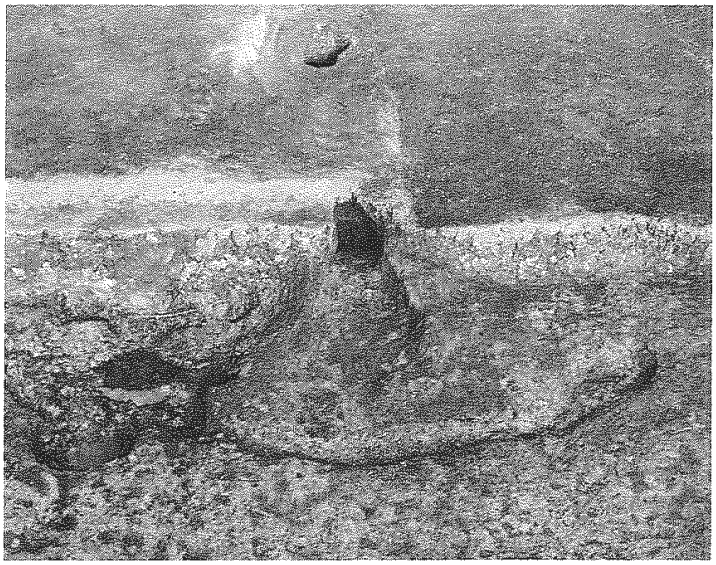
カマド左側にピット1があり，堆積土に焼土，炭化物が多量に含む。貯蔵穴の可能注がある。



第18図　第21号住居跡



全体



カマド

写真17　第21号住居跡

土平遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	平面形	規模 東西×南北 m	焼け面 カマドの向き	複合関係	カマド本体・焼け面			カマド本体の構築方法	煙道		主柱穴	貯蔵穴	周溝
					カマドor焼け面	位置	規模 cm		形態	規模 cm			
1住	方形	4.20×4.20	東南東		焼け面	東壁近く南より	60×50	貼り付け			4	なし	一部あり
2	堆定方形	7.50×(4.60)	北北東								2	有(1個)	有り
3	不明	(?)×3.20	北	7住を切る	カマド	北壁	90×40	貼り付け	一部トンネル状	20×140	不明	なし	あり
4	堆定方形	2.20×(2.20)	東南東	5住を切る	カマド	東壁中央	80×60	削り出し	トンネル状	20×150	4	なし	
5	不明		北西	4住に切られる	カマド	北壁	(80)×70	貼り付け	なし		なし	なし	
6	堆定方形	4.60×(2.40)	北北東		カマド	北壁中央	100×80	削り出し	トンネル状	30×140	2	有(1個)	
7	堆定方形	4.20×(4.60)	北	3住に切られる	カマド	北壁中央	80×70	貼り付け	溝状	20×170	3	なし	
8	堆定方形	3.40×(2.40)	北	9住を切る	カマド	北壁中央	120×80	削り出し	一部トンネル状	30×120	なし	なし	
9	堆定方形	4.00×(0.80)	北	8住に切られる	焼け面	北壁中央近く	40×30		2本トンネル状	15×150 15×150	なし	なし	
10	方形	3.50×3.60	北北東		カマド	北壁中央	100×90	削り出し	溝状	20×170	なし	なし	
11	堆定方形	3.60×(2.00)	北北西		カマド	北壁東より	90×60	貼り付け	溝状	20×130	不明	なし	一部あり
12	方形	4.00×3.80	北北西		カマド	北壁中央	90×50	貼り付け	トンネル状	30×170	4	なし	
13	方形	6.80×6.70	北北西		カマド	北壁中央	100×100	貼り付け	一部トンネル状	30×140	4	有(1個)	
14	方形	2.80×2.30	東南東		カマド	東壁南より	80×50	貼り付け	溝状	20×85	不明	なし	
15	方形	3.70×3.60	不明		なし						不明	有(1個)	
16	不明		東(?)		焼け面	東壁	20×20				不明	なし	
17	方形	3.70×3.90	北		焼け面	北壁中央近く	35×30				不明	なし	
18	方形	7.60×7.30	東	19住に切られる	なし				トンネル状	30×210	不明	なし	一部あり
19	方形	5.70×5.90	北	18住を切る	カマド	北壁中央	110×70	貼り付け	一部トンネル状	20×170	4	なし	有
20	方形	3.10×3.00	北		カマド	北壁東より	100×70	削り出し	トンネル状	15×110	なし	なし	
21	方形	4.50×4.40	北		カマド	北壁中央	100×60	貼り付け	トンネル状	20×150	4	有(1個)	

3. 掘立柱建物跡

調査区中央部の北側に1棟検出された。柱穴の伺本かは第18・19号住居跡の堆積土上面より，他は地山面より確認されており，これらの住居跡より新しい。

桁行6間約13.2m（間隔約2.2m平均）×梁行1間約4.2mであり，東西に長い建物である。柱穴の配列からすると桁と梁の方向は直行せず，若干ゆがんでいる。

柱穴の掘り方は直径約40cmの円形で，柱痕が検出されたものでは直径約15cmの円形である。

建物の北側には約1.4mはなれて桁に平行するピット列がみられ庇とも考えられたが，半数は梁の方向からはずれている。

建物に伴う遺物としては掘り方の埋土より須恵器が出土しており，古代に属するものである可能性が強い。

写真18　掘立柱建物跡（一×五間分検出まで）

Ⅴ　まとめと問題点

今回の調査では，遺跡のほぼ全域を調査したことになる。この結果発見された住居跡群は，1つの集落を構成する住居跡の大部分が含まれていると考えられる。住居の所属時期については，まだ遺物の整理が進んでいないので詳細は不明であり，重複しているものもあるのですべてが同時に存在したとはいえないが，発掘時の観察からすればほぼ同一時期に属するものと考えられる。住居跡に伴出している遺物は土師器・須恵器が大半であり，その中でも土師器が主体を占める。これらの土師器にはロクロを使用した痕跡はないようであり，また明確に栗囲式以前に属するような特徴をもつものはない。総体としては，以前に県教委で発掘した志波姫町糠塚遺跡の住居跡に伴出している土師器に近似している。現在糠塚遺跡の遺物の多くは国分寺下層式並行と考えられているので，本遺跡の場合も，ほぼそれに近い時期に属する可能性が強い。ただし，現在国分寺下層式は8世紀後半から9世紀初頭の年代を与えられているが，その内容は必ずしも明確に把握されておらず，須恵器との共伴関係についても不明の点が多く，本住居跡群の年代を正しく指摘することはできない。

〈集落の構成〉

1. 住居跡の配置

21軒の竪穴住居跡は，西側の浅い谷から中央平坦面北部へ，さらに南東部へと南側に開いた半円を描いて連なっている。これらはほぼ同一時期に属する可能性が強く，1つの集落の住居の配置にある程度の規則性があった可能性がある。また北東部にある第20・21号住居跡は一連の群からやや離れた所に位置しており，他とは違った性格をもつものかも知れない。

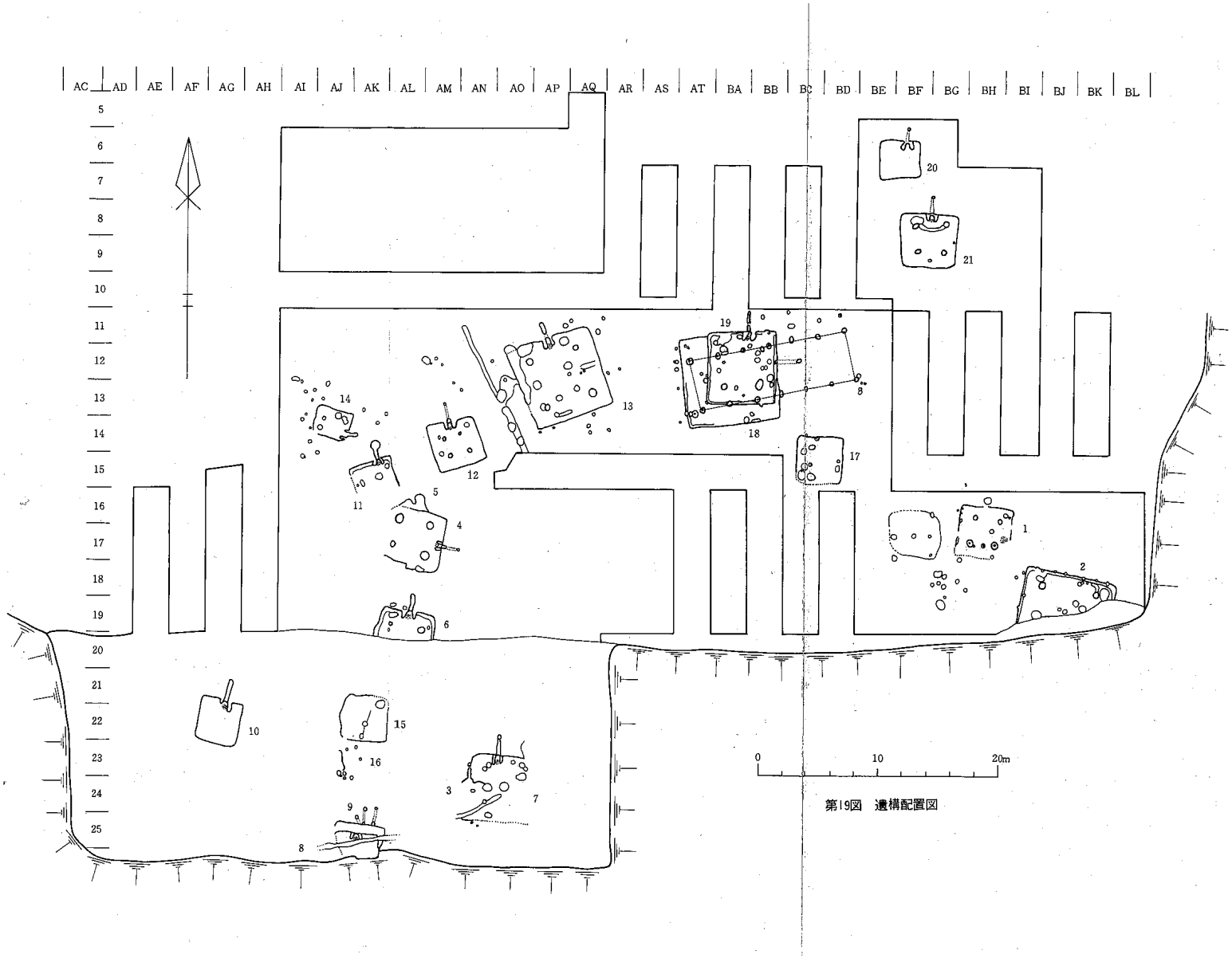
2. 規模

規模の点からすると大・小2つに分けられそうである。大形のものは第12・13・18・19号住居跡の4軒で，一辺が約6～7.5cmある。第18・19号住居跡は重複しており，中央平坦面の北側に位置する。第13号住居跡は第18・19号住居跡の西どなりにある。第2号住居跡は，南東部に位置する。小形のものは15軒あり，1辺が約2.5～4.2mである。他に規模の不明なものが2軒ある。

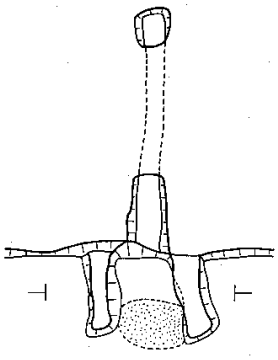
3. カマドの方向

カマドの向きは，大きく分けて北向きと東向きがある。東向きのものは第4・14・19号住居跡の4軒で，全体に分散して位置している。北向きのものは13軒で，他に不明が1軒ある。

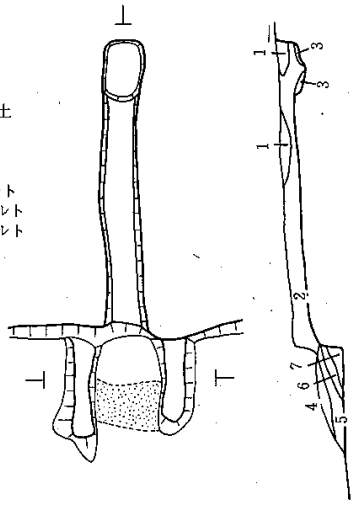
このように，集落の構成として住居跡群をみると，配置は規則性をもつ可能性があり，その中で群からはずれるような住居，規模の違い，カマド・焼け面の向きの違いがみられるなど興味深い点があり，今後の整理における問題点としたい。

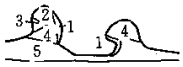

AC AD AE AF AG AH AI AJ AK AL AM AN AO AP AQ AR AS AT BA BB BC BD BE BF BG BH BI BJ BK BL
5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21
0 10 20m

第19図　遺構配置図



1. 焼土を含むよごれた粘土
2. 黒褐色 5 YR2/2 シルト
3. 1と同じ
4. 黒褐色 5 YR2/2 シルト
5. 暗赤褐色 5 YR3/2 シルト
6. 暗赤灰色2.5YR3/1 シルト
7. 暗赤褐色2.5YR3/2 シルト





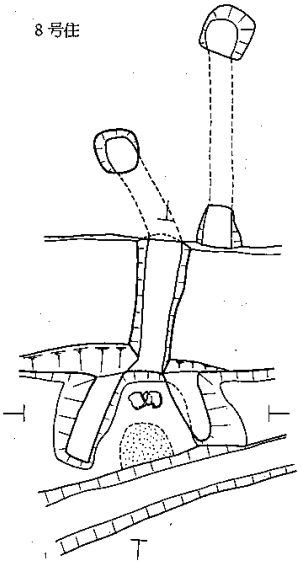
4 号住

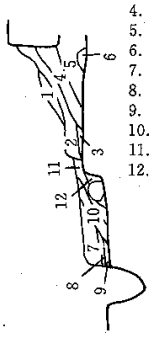
1. 焼け面
2. 焼土
3. 暗褐色10YR3/3 シルト
4. 暗褐色10YR3/4 シルト
5. 暗褐色10YR2/3 シルト

7 号住

1. 黒褐色 4 YR2/3
2. 黒褐色7.5YR3/2

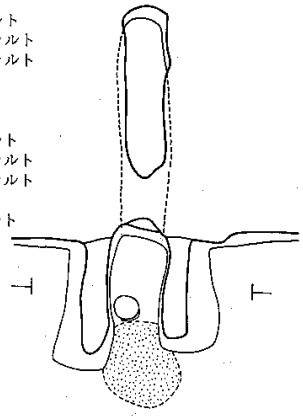
8 号住



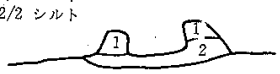


1. 黒褐色10YR3/2 シルト
2. 暗赤褐色 5 YR3/2 シルト
3. 極暗赤褐色 5 YR2/4 シルト
4. 極暗赤褐色 5 YR2/3 シルト
5. 黒褐色10YR3/2 シルト
6. 焼土・粘土のブロック
7. 黒褐色10YR3/2 シルト
8. 暗赤褐色 5 YR3/2 シルト
9. 極暗赤褐色 5 YR2/4 シルト
10. 極暗赤褐色 5 YR2/3 シルト
11. 暗褐色10YR3/3 シルト
12. 暗赤褐色 5 YR3/3 シルト

13号住



1. 暗褐色7.5YR3/4 シルト
2. 黒褐色7.5YR2/2 シルト



第20図　カマド

〈住居跡の構造〉

個々の住居跡の形態は，ほぼ方形のプランをもち，一方の壁にカマドを備えているものが多く，柱穴は対をなしてほぼ対角線上に4個あり，まれに貯蔵穴や周溝がみられる，といった基本的には他地域の同時代の住居跡に共通した構造のものである。

ここでは住居の構造のうち特にカマドを取り上げてみたい。

カマドの構造

カマドの認められる住居跡は14軒ある。本体は住居内部の床面上に，一方の壁に接して構築されている。本体の天井部はすべてすでに崩れて，多くの場合内部に堆積しており，材質を知ることができる。燃焼部の奥，本体の中央部には土師器の坏や甕を逆さにふせて支脚として利用したものや土製の支脚がみられるものもある。

本体の奥壁から外側に煙道がのび，先端に煙り出しの穴がついている。煙道は地面をくり抜いたトンネル状のものと，溝状のものとが検出されたが，竪穴の保存状態，壁の高さなどを考えると，おそらく両者共に原形はほとんどがトンネル状をなしていたものと思われる。

カマド本体の構築方法

次に本体（両袖）の構築方法をみると，（1）貼り付けのもの，（2）削り出しのもの，の2種類がある。

（1）貼り付けのもの－住居を作る際に，掘り上げた竪穴の一方の壁に粘土その他を用いて構築するものである。第3・5・7・11・12・13・14・19・21号住居跡の9軒がこの方法による。土師器を伴った時期の住居跡にみられるカマドの場合，この方法で作られているものが圧倒的に多い。また一般に粘土が材料として考えられているものが多いが，本遺跡の場合は必ずしもそうではない。住居跡の精査が一応完了した後にカマド本体の袖を横に切ってみると，暗褐色ないし黒褐色のシルト質で，遺物包含層第3層の土に近似した土によって構築されていることが知られる。

さらに本体の天井部は袖とは違った土で作られている可能性が強い。本体内部の堆積土をみると，天井部の崩落したらしいレンズ状の層がみられ，下面は下方からの熱を受けて赤変し硬くなっている。この土は黄褐色あるいは灰色の粘土である。

貼り付けの場合はさらに2種類があり，1つは土だけで構築したものであり，もう一つは袖の先端部を土師器の甕で補強しているものである。後者の方法によるものは第12・14居跡の2軒のみである。

（2）削り出しによるもの－竪穴を掘り込む際に，一部分を掘り残してカマドを構築しているといえるものである。第4・6・8・10・20号住居跡の5軒がこの方法による。これらの住居跡カマドの本体は，天井部がすでに崩落して袖が残存しているのは他と変わりない。第8・10

号住居の場合は遺構の確認面が地山面なので袖は地山の土である。他の第4・5・20号住居跡の場合は包含層第3層より確認されているので袖は下半が地山，上半が包含層第3層であり，壁と連続した層位であると観察される。遺物包含層第3層は，発掘時には地山などに比べればかなり軟かいものであり，袖の用に足りるのかとも思われたが，一旦乾燥すると非常に硬く，地山より硬いとさえいえる。

また天井部の材料については，（1）の貼りつけの場合と同様のことがいえる。

この削り出しのカマド本体については，まだ不明な点もあるので，今後の整理の進展に伴ってさらに検討を加えるつもりである。

参考文献

志間泰治「柴田町の文化財ー遺跡と遺物ー」柴田町の文化財第5集　柴田町教育委員会

昭和49年度文化財保護課職員

			調査第一係					
課　長		西川　十郎	技術主査兼係長	氏家　和典	調査第二係	係長	斎藤　良治
副参事		村上　　正	技術主査	早坂　春一		技術主査	佐々木茂禎
課長補佐		大石　正巳	〃　〃	平沢英二郎		技術	加藤　道男
総務係	係長	桜井　雄二	技術	白鳥　良一		〃	丹羽　　茂
	主事	佐藤　博重	〃	鈴木惣之助		〃	斎藤　吉弘
	〃	小笠原　任	〃	小井川和夫		〃	宮崎　敬典
管理係	係長	扇　　正人	〃	高橋　守克		〃	佐藤　好一
	主事	佐藤はちえ	嘱託	恵美　昌之		嘱託	柳田　俊雄
	〃	渡辺　和彦	〃	熊谷　幹男		〃	真山　　悟
保護協会	書記	蜂谷マサ子	〃	阿部　　恵		〃	芳賀　寿幸
			〃	中島　　直		〃	阿部　博志
			〃	清野俊太郎		〃	森　　貢喜
			〃	後藤　幸雄		〃	手塚　　均
			〃	林　　和男		〃	青沼　一民
			補助員	山崎くみ子		補助員	伊藤　玲子
				菊地　恵子		〃	伊藤　康子
						〃	菅原　正年